

ソーシャルワーク・レポトリーとしての ケアマネジメントの意義 —レポトリー比較からの考察—

河野高志

はじめに

介護保険制度の普及にともない、ケアマネジメントという用語は広く一般に認知されるようになった。しかし、ソーシャルワークやケアマネジメントの研究者や実践者の間では、それが対人支援の方法なのか政策的手法なのかについての共通認識は未だ得られていない。そのため、多様な特徴が明らかになっているにもかかわらず、ケアマネジメントの位置づけや概念は曖昧なままになっている。そして、このようなケアマネジメントの位置づけや概念についての論争が続いていることによって、ケアマネジメントがもつ幅広い特徴を包括・統合して展開する方法の構築にまで議論が至っていないのである。

そのなかでも特に、対人支援方法としてのケアマネジメントの展開は混迷しているといえる。それは現在のケアマネジメント研究が、主にアメリカで開発されたケアマネジメントの実践モデルの紹介や、チームアセスメントやネットワークングといった一部の機能に焦点化した実践の分析を行うにとどまっておき、幅広い特徴を包括・統合したケアマネジメント展開の考察をほとんど行っていないからである。そのため、介護保険制度の普及にともなって一定の展開枠組みが示された政策的手法としてのケアマネジメントに比べて、未だ展開の枠組みが不明確な対人支援方法としてのケアマネジメントの立場から、包括・統合的な展開の枠組みを検討していくことは重要であるといえる。

そこで本稿では、対人支援方法としてのケアマネジメントの立場からその展開方法について検討してみたい。そして、そのためには生活支援の体系であるソーシャルワークとの関連からケアマネジメントの特徴を考察することが重要であると考えている。それゆえ本稿では、ケアマネジメントをソーシャルワークの方法群であるレポトリーに位置づけ、その特徴とソーシャルワークにおける固有性や重要性を明らかにすることを目的とする。また、そのために本稿では文献研究を行う。具体的には、ソーシャルワークの方法に関する先行研究を分析し、ケアマネジメント

と他のソーシャルワークの方法を比較することによって、ケアマネジメントの特徴とソーシャルワークにおける固有性を明確にしていく。このような目的と手順によって、未だ明らかにされていない包括・統合的なケアマネジメント展開の確立のための手がかりを、対人支援方法すなわちソーシャルワークの立場から考察していきたい。

1. ソーシャルワークからのケアマネジメント考察の必要性

(1) ソーシャルワークにおけるレパトリーの意味

先行研究をみる限り、ケアマネジメントを一つの方法と考えてソーシャルワークに位置づける研究者の多くは、ソーシャルワーク・レパトリーに含めている。このソーシャルワーク・レパトリーそのものについて整理している数少ない研究者の一人である Bartlett, H.M. によると、ソーシャルワーク・レパトリーとは、統合化以前の伝統的な方法の概念より広い見解をもち、広範囲に及ぶ調整活動を展開していく可能性と状況に応じて選択的に活用していく責任をソーシャルワーカーに与える新たな方法の概念であるといわれている (Bartlett = 2009 : 75-80)。また、太田はソーシャルワーク・レパトリーを、ソーシャルワーク方法論を前提とする実践へのあらゆる方法を内包した総体から構成される支援活動概念であると述べている。そして彼は、具体的にかつてのケースワーク、グループワーク、コミュニティ・オーガニゼーションという伝統的三分法から、プログラム・マネジメントやプランニング、アドミニストレーション、さらにマクロな社会的視点より社会資源のネットワークや社会福祉計画の策定などの内容を内包する広範な方法群であると指摘している (太田 1992 : 7-10)。

すなわちソーシャルワーク・レパトリーは、現代の利用者がもつ複雑多様なニーズに対応するため、ソーシャルワークという生活支援の基盤にもとづいて、固有な特徴からなる個別具体的な支援方法を臨機応変に活用していくという考え方を基礎にした概念であると整理できよう。また、太田の指摘した方法群とは、広範囲に及ぶ調整活動を可能にするための、ミクロからマクロまでの幅広い実践レベルで活用可能な方法の集まりと理解できる。それゆえ、ソーシャルワーク・レパトリーは、ミクロからマクロまでのソーシャルワーク実践を展開するため、支援の目的や状況、実践レベルなどに応じてソーシャルワーカーが選択的に組み合わせて活用していく広範な方法群をもっていると考えられるのである。

(2) ソーシャルワークとケアマネジメントの関係

しかしながら日本のケアマネジメントは、介護保険制度とむすびついて登場してきたことから、ソーシャルワークとは別ものと考えられることがある。たとえば秋山薊二は、介護保険制度のケアマネジメントが利用者の現実的生活維持の対応策であり、介護に焦点を当てていると指摘している。そしてそのことから彼は、ケアマネジメントがソーシャルワークの基盤をもっていないため、ソーシャルワークの一部とみなすことはきわめて困難であると述べている (太田・秋山

2002:230 - 1)。また、副田あけみは、「ケースマネジメントはソーシャルワークの一アプローチとしてではなく、効果的・効率的な統合的サービス供給のシステムづくりと実践方法を探究する行政のプロジェクトをとおして、1970年代にアメリカで登場し定着してきた」(久保・副田2005:159)と述べ、歴史的観点からケアマネジメントがソーシャルワークと異なる発展を遂げてきたと主張した。これらは、日本のケアマネジメントの成り立ちからケアマネジメントをソーシャルワークと異なる方法であると論じている。

一方、ケアマネジメントをソーシャルワークの一部と考える見方もある。たとえば太田義弘と小榮住まゆ子は、ケアマネジメントの中心的かつ不可欠な機能である連携や協働がRichmond, M. E.の時代からソーシャルワークで研究・実践されてきたものであり、ソーシャルワークのなかから生まれてきた方法であると主張している(太田・小榮住2005:6 - 8)。また中村佐織は、ケアマネジメントがソーシャルワークの唯一のアプローチでないことを強調しながらも、それがソーシャルワークの実践方法そのものであると指摘している(中村2002:65 - 6)。

このようにソーシャルワーク研究者のなかでも多様な見解に分かれているのが、日本のケアマネジメントの現状であろう。しかし、どちらもソーシャルワークとの関係のなかでケアマネジメントを論じている点では共通である。そこで本稿では、ソーシャルワークとの関係でケアマネジメントを考察することによって、ソーシャルワークにおけるケアマネジメントの特徴を整理していきたい。なぜなら、そのことが多様な特徴をもつケアマネジメントの具体的な展開枠組みの明確化に役立つと考えるからである。

(3) ソーシャルワークからみたケアマネジメントの特徴

ケアマネジメントの特徴をソーシャルワークとの関係から考察する際には、ケースワークやコミュニティ・オーガニゼーションなどの他の支援方法と比較考察し分析することが従来行われてきた。このソーシャルワークの支援方法について太田は、「課題を遂行し目標を達成するために、いかに支援し、どのように目的や計画を立て、手段をいかに講じるかという活動を意味し、系統立った課題解決を見出す活動から構成されていることから、問題の克服と課題の達成を目標に、特殊な状況に対応した活動を展開する過程」(太田1992:9)であると述べている。つまりソーシャルワークの支援方法には、利用者の問題の克服や課題の達成を目的とした固有な過程があり、過程を展開する支援活動が含まれているのである。すなわちソーシャルワークの支援方法には、それぞれの方法がもつ独自の目的やそのための過程と支援活動がある。それゆえ、ケアマネジメントの特徴をソーシャルワークの枠組みから考察するには、その固有な目的や過程、支援活動を明らかにすることが必要である。

そこで次に、この視点からケアマネジメントの特徴をみていきたい。まず、ケアマネジメントの目的は、費用対効果を重視する社会政策から影響を受けたため、効果的かつ効率的なサービスの調整と提供を計画することである。しかし、ソーシャルワークの範囲は、「主として個人に焦点を置いた心理社会的プロセスから社会政策、社会計画及び社会開発への参画にまで及ぶ」(国

際ソーシャルワーク学校連盟・国際ソーシャルワーカー連盟2009：10 - 1)といわれるようにミクロからマクロまでを含む。これに照らし合わせてみると、サービスや資源の効率的な調整と提供を意図した社会政策を具体化する手段としてのケアマネジメントは、ソーシャルワークに含めることができるだろう。また、ケアマネジメントには、インテークやアセスメントから始まりプランニング、プランの実施、モニタリングと展開する一連の局面（白澤1992：17）や、仲介、連結、調整、ネットワーキングなど（Moxley1989：95）の支援活動がある。これらは、ソーシャルワーク研究者が先行研究で指摘してきたように、ソーシャルワークにおいて発展してきた対人支援の実践活動そのものである。

このように目的、過程、支援活動を視野に入れてケアマネジメントの先行研究をみると、ソーシャルワークの一つの方法としての共通要素が十分にあると考えることができる。そこで次に、これらの要素について詳細に考察していくことで、ソーシャルワークにおけるケアマネジメントの特徴を明確にしていきたい。また、以上のことからケアマネジメントは、ミクロからマクロにわたる目的や支援活動、過程をもつと考えられるため、ソーシャルワークを展開するための一つの方法といえることができる。そして、その方法が集まって方法群、すなわちソーシャルワーク・レパトリーを構成することから、ケアマネジメントはソーシャルワーク・レパトリーに位置づけることができるのである。

2. ソーシャルワーク・レパトリーとしてのケアマネジメントの特徴

(1) 先行研究にみるソーシャルワークの六つのレパトリー

ソーシャルワーク・レパトリーとしてのケアマネジメントの特徴を明確にしていくには、すでに述べてきたように、他のソーシャルワーク・レパトリーとの比較をすることが重要である。しかし、ソーシャルワーク・レパトリーの分類にはいくつかの見解があるため、その点について共通理解を図っておく必要がある。

そこでまず、ソーシャルワーク・レパトリーの数や内容などの整理をすることからはじめたい。たとえば、Zastrow, C. は、①ソーシャル・ケースワーク、②ケアマネジメント、③グループワーク、④グループカウンセリング、⑤ファミリーカウンセリング、⑥コミュニティ・オーガニゼーション、⑦ポリシー・アナリシス、⑧アドミニストレーションの八つに整理している（Zastrow 2007：29-32）。これをもとに考えてみると、その他にはSkidmore, R.A. らが、1) 個人へのソーシャルワーク（Social Work Practice with Individuals）、2) 集団へのソーシャルワーク（Social Work Practice with Groups）、3) コミュニティへのソーシャルワーク（Social Work Practice with Communities）、4) 管理運営と調査（Administration and Research）、の四つに分類している考え方もある（Skidmore ら 1994）。

特にSkidmore, R.A. らは、この四分類のうちの三分類について、1) 個人へのソーシャルワークのなかでケースワーク、2) 集団へのソーシャルワークのなかでグループワーク、3) コミュニ

ティへのソーシャルワークのなかでコミュニティ・オーガニゼーション、について詳細に述べており、それらが相互に対応していると論じている。また彼らは、ケアマネジメントを、「複雑かつ多様な問題や障害をもつ個人や家族へのサービス提供のために設計された新たな対人サービスの形態」(Skidmore ら 1994:307)であり、ソーシャルワークの一つのサービスとして論じている。しかし、4) 管理運営と調査については、それぞれを独立した内容で論じている。このことについては Zastrow, C. が、アドミニストレーションを単独でソーシャルワーク・レパトリーに分類していることや、武田丈がソーシャルワーク・リサーチを、「福祉ニーズや問題の把握、社会福祉サービスや政策の評価、個別ケースでの介入や援助の効果測定、さらにはソーシャルワークに必要な知識の蓄積や理論構築に関する質的・量的な実証研究の総称」(武田 2002:176)と単独の方法として述べているように、管理運営と調査をそれぞれ独立したソーシャルワーク・レパトリーと考えることが妥当であろう。

そこで再度、Zastrow, C. の分類に焦点化すると、④グループカウンセリングは Toseland, R.W. らが整理したグループワークの治療グループ (Toseland ら = 2003:39-40) に当てはまり、⑤ファミリーカウンセリングは久保絃章らがケースワークに含めている家族療法と同義に解釈できる(久保・副田 2005:53-71)。そして、⑦ポリシー・アナリシスについては、コミュニティ・オーガニゼーションに包含されるポリシープラクティス・モデル (高森ら 1989:118-9) の役割の一つと重複すると考えられる。

このように Zastrow, C. の八つの分類を他の先行研究と比較しながら再整理を行っていくと、ソーシャルワーク・レパトリーは、

- (1) ケースワーク
- (2) グループワーク
- (3) コミュニティ・オーガニゼーション
- (4) アドミニストレーション
- (5) ソーシャルワーク・リサーチ
- (6) ケアマネジメント

の六つの分類に構成することが可能である。

(2) ソーシャルワーク・レパトリーの特徴の整理

六つに再整理したソーシャルワーク・レパトリーは全て、「方法とそれを具体化した技法によって構成される援助目標に対する手段」(太田 1992:9)をもつと考えられる。そのため、それぞれに固有の介入の目的、ソーシャルワーカーの役割、アプローチをもっている。そこでここでは、この六つに分けたソーシャルワーク・レパトリーの特徴を整理していきたい。

1) ケースワーク

Richmond, M.E. はケースワークを、「人々と社会環境の間の作用の調整をとおして、個人の人格や福祉を成長・発展させること」(Richmond 1930:577)、または、「人間と社会環境との間を

個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程」(Richmond = 1991 : 57) と定義している。そこでは、基本的にソーシャルワーカーと利用者が一対一の関係となり、利用者が周囲の環境や社会・経済的圧力に適応できるように支援することが目的となる (Zastrow 2007 : 29)。そして、その目的を達成するためにソーシャルワーカーは、利用者の問題解決や成長・発達を促進する役割をもつ。具体的な展開では、心理社会的アプローチ、機能的アプローチ、問題解決アプローチ、家族療法、行動療法アプローチ、課題中心アプローチ、危機介入アプローチ、ナラティブ・アプローチなどを活用する (大塚ら 1994 ; 太田・秋山 2002 : 229 ; 久保・副田 2005)。

2) グループワーク

Konopka, G. はグループワークを、「意図的なグループ経験をとおして人々の社会的機能の拡大を支援し、また人々が個人、集団あるいはコミュニティの問題をより効果的に対処できるよう支援するソーシャルワークの方法」と定義している (Konopka 1983 : 30)。そこでグループワークでは、利用者との相互作用の妨げとなるものを減らし取り除くことや、社会的に望ましい目的を達成することが目指されるのである (Skidmore ら 1994 : 73)。そのため、グループメンバーに社会資源を紹介し仲介することや、グループメンバーのニーズを満たすように施設・機関などとの媒介を果たすことがソーシャルワーカーの役割である (大塚ら 1986 : 168-74)。具体的な展開では、支持グループ、教育グループ、成長グループ、治療 (カウンセリング) グループ、社会化グループ、レクリエーション・グループ、課題グループ、フォーカス・グループ、セルフヘルプ・グループ、エンカウンター・グループといったアプローチを活用する (太田・秋山 2002 : 229 ; Toseland ら = 2003)。

3) コミュニティ・オーガニゼーション

Skidmore, R.A. らはコミュニティ・オーガニゼーションを、「社会問題を探り出すためにコミュニティの機関や資源を活用し、またそれらの問題を取り除くために適切な行動を起こすグループ間の過程 (intergroup process)」と定義している。そこでのソーシャルワーカーは、地域の機関や資源を用いて、地域社会の問題解決を行うことを目的とする。そしてそのために、機関と地域の両方において政策を活用して対人サービスのプログラムを方向づけると同時に、それらの政策やプログラムの修正や変更を行う役割を担うのである (Skidmore ら 1994 : 93)。具体的に高森らによると Rothman, J. は、公共の資源が明らかに制限されている場合に小地域開発モデル、高度に複雑性をもつ問題への対応に社会計画モデル、社会のなかで財や資源の配分が不平等な状況にソーシャルアクション・モデル、というように状況に応じて活動する統合的なアプローチを提唱している。また Rothman, J. は、政策分析にもとづき政策の改良を目指すポリシープラクティス・モデルや、組織を円滑に機能させるアドミニストレーション・モデルの活用も視野に入れている (高森ら 1989 : 115-20)。

4) アドミニストレーション

Skidmore, R.A. は、Kidneigh, J.C. (1950), Spencer, S.W. (1961), Dunham, A. (1962), Stein,

H. (1970), Trecker, H. (1971) らの定義を整理してアドミニストレーションを、「政策を社会サービスの提供に転換する社会的な過程」と述べ、計画化 (planning), 組織化 (organizing), 人員配置 (stuffing), 指導 (directing), 管理 (controlling) からなる過程を有すると論じている (Skidmore 1995: 3)。また、そこには、スーパービジョンやコンサルテーションも含まれている (Skidmore 1994: 108)。なぜならその目的は、ソーシャルサービス機関の全てのプログラムを運用することにあるからである。そのためソーシャルワーカーには、機関プログラムの目標設定、社会状況の分析、提供するサービス内容の決定、スタッフの雇用とスーパービジョン、財務管理、資金の収集、などの役割がある (Zastrow 2007: 32)。そして、それらの役割を果たすためには、管理者の姿勢や方針、戦略の違いによる意思決定の過程に注目して、独裁モデル、管理モデル、科学的マネジメントモデル、人間関係モデル、X理論とY理論、団体モデル、Z理論、目的によるマネジメント、トータル・クオリティ・マネジメントといったアプローチが活用される (Zastrow 2007: 246-63)。

5) ソーシャルワーク・リサーチ

Philip, A.E. らは、「ソーシャルワークの文脈においてリサーチは、実践で直面する問題を様式化したり、調査の領域をより明快にする手法に関係し、それによりその問題を客観的で追試可能なやり方で研究すること」(Philip 1975: 5) と定義している。そのため、「福祉ニーズや問題の把握、社会福祉サービスや政策の評価、個別ケースでの介入や援助の効果測定、さらにはソーシャルワークに必要な知識の蓄積や理論構築に関する質的・量的な実証研究」(武田 2002: 176) を行うことが目的となる。そしてソーシャルワーカーには、ソーシャルワークの調査技術を駆使する役割が求められている。具体的には、量的リサーチとして集団比較実験計画法、単一事例実験計画法、社会調査などがあり、質的リサーチとしてケーススタディ、バイオグラフィー、エスノグラフィー、フェノメノロジー、グラウンデッド・セオリーなどがある (武田 2002: 177)。

6) ケアマネジメント

ケアマネジメントは、サービスや資源を効果的かつ効率的に活用できるよう調整し、利用者のニーズにあわせて提供する支援方法である。また、そこでの目的を細分化してみると、政策的側面からみると資源管理と費用抑制であり、実践的側面からみると利用者を中心としたサービスや資源の調整とサービス・システムの連携である。そのためソーシャルワーカーは、利用者の生活状況と地域の資源と予算の両方を把握してサービスを提供するという役割をもつのである。具体的な展開には、最小限モデル、コーディネーション・モデル、包括モデル、臨床的モデル、積極的アウトリーチモデル、ストレングス・モデル、アドボカシー／エンパワーメント・デザイン、権利擁護モデル、仲介モデル、サービス管理モデル、マネジドケア・モデル、パクト・モデル、リハビリテーション・モデルといった多様なアプローチがある (白澤 1992; Rose 1997; 副田 1999; 橋本ら 2000)。

(3) 各ソーシャルワーク・レパトリーの介入特性

すでに見てきたようにソーシャルワーク・レパトリーには、それぞれ独自の目的やソーシャルワーカーの役割、さらにアプローチがある。そこで、これまで述べてきた六つのソーシャルワーク・レパトリーの特徴を、ソーシャルワーク・レパトリーの固有な目的とソーシャルワーカー独自の役割に焦点化してみると表1のように整理できる。そして表1をみると、ケアマネジメントはソーシャルワークのミクロからマクロの範囲にかかわる目的と方法を有していることが理解できるだろう。

表1 ソーシャルワーク・レパトリーの特徴の違い

分類	目的	ソーシャルワーカーの役割
①ケースワーク	ソーシャルワーカーと利用者が一対一の関係となり、利用者が周囲の環境や社会・経済的圧力に適応できるように支援すること	利用者の問題解決や成長・発達を促進する
②グループワーク	利用者との相互作用の妨げとなるものを減らし取り除くことや、社会的に望ましい目的を達成すること	グループメンバーに社会資源を紹介・仲介することや、グループメンバーのニーズを満たすように施設・機関などとの媒介を果たす
③コミュニティ・オーガニゼーション	地域の機関や資源を用いて、地域社会の問題解決を行うこと	機関とコミュニティの両方において政策を活用して対人サービスのプログラムを方向づけると同時に、それらの政策やプログラムの修正や変更を行う
④アドミニストレーション	ソーシャルサービス機関の全てのプログラムを運用すること	機関プログラムの目標設定、社会状況の分析、提供するサービス内容の決定、スタッフの雇用とスーパービジョン、財務管理、資金の収集などを行う
⑤ソーシャルワーク・リサーチ	福祉ニーズや問題の把握、社会福祉サービスや政策の評価、個別ケースの介入や援助の効果測定、さらにはソーシャルワークに必要な知識の蓄積や理論構築に関する質的・量的な実証研究を行うこと	ソーシャルワークの調査技術を駆使する
⑥ケアマネジメント	①政策的側面からみると資源管理と費用抑制を行うこと ②実践的側面からみると利用者を中心としたサービスや資源の調整とサービス・システムの連携を行うこと →サービスや資源を効果的かつ効率的に活用できるよう調整し、利用者のニーズにあわせて提供すること	利用者の生活状況と地域の資源と予算の両方を把握してサービスを提供する

(筆者作成)

3. レパトリー比較からみるケアマネジメントの意味

(1) ケアマネジメントと各レパトリーの特徴の比較

表1でも指摘したように、ソーシャルワーク・レパトリーはそれぞれが固有な目的と独自の方法をもっている。なかでもケアマネジメントがソーシャルワーク・レパトリーとしての意義をもつと思われるのは、広い支援範囲をもつため他のレパトリーと相互に関連をもちながら利用者支援を効果的に展開していくことができると考えられる点である。そこで本節では、ソーシャルワーク・レパトリーがもつ“状況や目的、実践レベルに応じた選択と活用”についての比較の観点をとおして、ソーシャルワークにおけるケアマネジメント展開の枠組みの特性を明らかにしていきたい。そのためここでは、他の五つのレパトリーとの共通点と相違点を示しながら、ソーシャルワークにおけるケアマネジメントの位置づけと意味を述べていきたい。

1) ケースワークとケアマネジメント

白澤はケアマネジメントを Richmond, M.E. 時代のケースワークの延長線上での発展であると考え、「ケースマネジメントはケースワークの原型」であると述べている（白澤 1992：22）。この見解は、ケースワークが人間と社会環境を視野に入れてその相互作用の調整を強調している点で、利用者のニーズにあわせてサービスや資源といった環境を調整するケアマネジメントと共通の要素があることを主張するものである。また、ケースワークの機能的アプローチがサービス提供機関という環境的要素を介入の主な対象としていることや、ケアマネジメントのストレングス・モデルが利用者のもつ力の発揮を強調していることは、ケースワークとケアマネジメントが類似している点である。

しかし本来、ケースワークは個人のパーソナリティの発達や適応力の向上を目的としており、一方でケアマネジメントはサービスや資源の計画的な調整と提供を目的としている。その意味では、この二つのレパトリーは基本的に異なる性質をもつといえる。

2) グループワークとケアマネジメント

先行研究をみる限り、グループワークとケアマネジメントの関係は特に論じられていない。しかし、グループワークの支持グループ、教育グループ、成長グループ、治療（カウンセリング）グループ、社会化グループ、レクリエーション・グループ、セルフヘルプ・グループ、エンカウンター・グループは、利用者の適応力や社会的機能の向上を目的としており、個人や集団に焦点をあてているため、ケアマネジメントとの関係はケースワークの場合と同様であると考えられる。

また、課題グループやフォーカス・グループにあたる機関の理事会や組織間の代表者会議など（Toseland ら = 2003:46-8）は、ケアマネジメントの機関運営や地域の連携にかかわるため、サービス・システムの連携や変革というケアマネジメントの目的と重複する。しかし、このグループワークはあくまで円滑なグループ運営に焦点を当てた方法であり、グループ自体が介入の対象となる。他方、ケアマネジメントは、機関の理事会や代表者会議といったグループ活動へのはたらかかけが選択肢の一つとなるものの、焦点は利用者への効果的なサービス提供を可能にすること

にある。そして、そのために地域のサービス・システムが介入の対象となるのである。すなわち両者は、グループの円滑な運営に焦点化する方法と、利用者支援の向上のために地域のサービス・システム全般を対象とする方法、という点で違いがあると考えられる。

3) コミュニティ・オーガニゼーションとケアマネジメント

白澤によると、ケアマネジメントは「常に地域住民と地域社会にある社会資源に視点を当てることを意図している以上、コミュニティ・オーガニゼーション技術の拡大としてとらえることも可能」である（白澤 1992：105）。なぜならそれは、コミュニティ・オーガニゼーションとケアマネジメントが、地域社会の問題の発見とその問題の解決を目的にしている点で共通しているからである。

しかし、地域社会の問題に対する視点は、コミュニティ・オーガニゼーションが地域社会全体の福祉問題や不利益を被っている人々の福祉問題にあるのに対して、ケアマネジメントが個別の利用者への支援のなかでサービスや資源を動員するための地域のサービス・システムへの働きかけにあるという違いがある。その意味では、問題認識の出発点が異なるのである。また、コミュニティ・オーガニゼーションは自治体などの政策やサービス提供機関のプログラムに焦点化した実践であり、利用者の支援過程の実践であるケアマネジメントとは目的も異なる。すなわち、より支援的な地域社会づくりを目指すコミュニティ・オーガニゼーションと、利用者のニーズに対応したサービス・システムの連携・変革や政策策定を目指すケアマネジメントには、介入の視点や目的、過程に相違がある。

4) アドミニストレーションとケアマネジメント

O'Conner, G.G. は、ケアマネジメントのエクソ・マクロ・レベルの実践に管理運営者の役割を想定し、そこに機関プログラムの開発や管理、運用を含めている（Moore 1990：447）。また、Raiff, N.R. からも、熟練したケアマネジャーが機関プログラムの設計やスタッフのスーパービジョンを行うという管理運営的な役割を果たす重要性について指摘している（Raiffら 1993：89-90）。その点で、アドミニストレーションとケアマネジメントには重複する部分がある。

しかし、アドミニストレーションが組織・機関の経営理念や存在意義を基盤とした効果的かつ効率的な管理運営の方法であるのに対し、ケアマネジメントは利用者ニーズにあわせて地域のサービス・システムを効果的に連携させる機能や、費用抑制を目的としてサービスや資源の管理・配分を遂行するために機関プログラムを運用する方法であるという違いがある。この違いは、アドミニストレーションが管理運営に特化した一連の実践体系からなる方法であるのに対して、ケアマネジメントは管理運営的な機能を果たすものの、利用者ニーズの充足や効率的な資源配分に焦点化した方法であることに集約される。つまりケアマネジメントは、人々への効果的なサービス提供を目指したサービス・システムづくりや、費用抑制や資源管理という政策方針のもとサービスや資源を効率的に利用者へ配分するために、機関の支援プログラムの運用などの管理運営的な機能を果たすのであって、組織の運営が第一の目的ではない。その点でケアマネジメントは、機関の管理運営を第一義的な目的とするアドミニストレーションとは異なる性質をもつといえる。

5) ソーシャルワーク・リサーチとケアマネジメント

武田によるとソーシャルワーク・リサーチは、「評価や効果測定による社会福祉実践の有効性の確認だけでなく、ニーズ把握や援助過程のモニターなど、現場ですぐに役に立つ情報を提供する」という側面をもっている（武田 2002：177）。そのため、そこにはケアマネジメントでのアセスメントやモニタリング、評価と関係する機能があると考えられる。しかしそれは、どのレパトリーにもかかわる機能であり、ケアマネジメントに限ったことでない。換言すると、ソーシャルワーク・リサーチは他のすべてのレパトリーと関係しているといえるのである。

また、そのことは、福祉ニーズや問題の把握、社会福祉サービスや政策の評価、個別ケースでの介入や支援の効果測定、ソーシャルワークの知識の蓄積や理論構築という目的をふまえると、個人やグループ、地域、機関などを支援することを第一の目的とした他のレパトリーと一線を画す性質をもつといえる。その意味で、ケアマネジメントとは異なる性質をもつのである。

(2) 比較にみるケアマネジメントの特徴

このように、ケアマネジメントと他の五つのレパトリーの比較をしてみると、そこには目的や介入対象・焦点について相違のあることが理解できよう。具体的には、同じような技術や技法を用いている場合でも、目的によって問題の認識や介入の対象、さらに介入の焦点が異なっている。そのことを表2のように俯瞰すると、目的と介入対象・焦点からみたソーシャルワーク・レパトリーの介入特性が明らかになった。

表2 ケアマネジメントと他のレパトリーの特性比較

レパトリー比較	目的と対象・焦点の違い
<p>ケースワーク と ケアマネジメント</p>	<p>【目的】 ケースワーク・・・個人のパーソナリティの発達や、周囲の環境や社会・経済的圧力に適応するための個人（利用者）の適応力の向上 ケアマネジメント・・・個人や集団のニーズにあわせたサービス・資源の効果的かつ効率的な提供</p> <p>【対象・焦点】</p> 
<p>グループワーク と ケアマネジメント</p>	<p>【目的】 グループワーク・・・①意図的なグループ経験による集団（利用者たち）の社会的機能の拡大、②理事会や代表者会議などをおとした円滑な機関運営やサービス・資源の連携 ケアマネジメント・・・グループを活用した機関運営やサービス・資源の連携による利用者支援の向上</p> <p>【対象・焦点】</p> 
<p>コミュニティ・ オーガニゼーション と ケアマネジメント</p>	<p>【目的】 コミュニティ・オーガニゼーション・・・①地域社会へのはたらきかけによる社会問題の解決の促進、②自治体の制度・政策や機関プログラムなどの改善をおとした支援的な地域づくり ケアマネジメント・・・個人や集団のニーズに関連する地域社会の問題解決と制度・政策の改善</p> <p>【対象・焦点】</p> 
<p>アドミニストレーション と ケアマネジメント</p>	<p>【目的】 アドミニストレーション・・・①制度・政策をサービスプログラムへ転換、②機関のサービスプログラムの効果的かつ効率的な運用 ケアマネジメント・・・利用者ニーズにそった効率的な機関プログラムの運用</p> <p>【対象・焦点】</p> 
<p>ソーシャルワーク・ リサーチ と ケアマネジメント</p>	<p>【目的】 ソーシャルワーク・リサーチ・・・①個人や集団、地域のニーズや問題の把握、②サービス・資源や機関プログラム、制度・政策の評価、③全ての対象への介入や支援の効果測定、④①～③をおとしたソーシャルワークの知識の蓄積や理論構築 ケアマネジメント・・・利用者（個人、集団）を中心とした支援システム（機関、地域、サービス・資源、制度・政策）の連携</p> <p>【対象・焦点】</p> 

(筆者作成)

(3) ソーシャルワーク・レパトリーとしてのケアマネジメント展開の特徴

この表2をふまえて、ソーシャルワークにおけるケアマネジメント固有の特徴を検討したい。そしてそれをおして、ソーシャルワークにおけるケアマネジメントの新たな展開への手がかりを考察していきたい。

まずケアマネジメント展開の特徴は、ケースワークとの比較をみてもわかるように、(A) 利用者のニーズにあわせたサービスや資源の効果的かつ効率的な調整と提供である。ケアマネジメントの基本的な目的には、利用者のニーズにあわせてサービスを提供することと、サービス提供に係る資源や予算の効率化を図ることがある。そのため、それらを包括・統合したケアマネジメントの展開枠組みには、できるだけ効率化を図りながら利用者のニーズにあわせてサービスや資源を調整して計画的に提供することが求められる。

次にグループワークとの比較からわかるケアマネジメント展開の特徴は、(B) グループを活用した効果的な機関運営とサービスや資源の調整である。これは、利用者に提供するサービスや資源を調整するために、サービス提供機関の運営にかかわるグループや、地域のサービスや資源の提供者からなるグループへはたらきかけることを意味している。これにより、利用者のニーズにあったサービスを効率的に提供するための調整を行うことができる。

そしてアドミニストレーションとの比較からわかるケアマネジメント展開の特徴は、(C) 利用者のニーズにそった効率的かつ円滑な機関プログラムの運用である。ソーシャルワーカーはケアマネジメントを展開するうえで、自らの所属する機関を含めて地域にあるサービス提供機関が利用者に対して適切なサービスを効率的に提供できない場合、その機関のサービスプログラムを修正・変更・企画するなどして利用者のニーズに応えることができる新たなサービス提供プログラムを作り出すことが求められる。

さらにコミュニティ・オーガニゼーションとの比較からわかるケアマネジメント展開の特徴は、(D) 利用者のニーズに関連する地域社会の問題解決と制度・政策の改善である。これは、利用者のニーズにあわせてサービスや資源を提供するうえで障壁となる地域社会の問題解決に取り組むことを指している。具体的には、サービスや資源の不足、地域住民の理解不足による利用者の孤立、制度・政策の不備や使いにくさ、などの問題の解決を目指すことである。

最後のケアマネジメントの特徴は、(E) ミクロ・レベルからマクロ・レベルにわたる利用者を中心とした支援システムの形成である。これは、上述した (A) ~ (D) をとおして、利用者へのサービス提供というミクロ・レベルから地域や制度・政策の問題解決を図るマクロ・レベルまでを関連づけた実践展開を行い、それによって地域の支援システムを形成して利用者支援に役立てるという包括・統合的な介入に固有な特徴があることを指摘したものである。すなわちケアマネジメントは、その幅広い特徴ゆえに他のソーシャルワーク・レパトリーと相互に関連しながら利用者支援を展開する一方で、ひとつのソーシャルワーク・レパトリーとしても多様な特徴を包括・統合した展開のなかで固有な特徴を発揮するのである。

おわりに

研究者によって多様な見解のあるケアマネジメントであるが、これまで考察してきたようにソーシャルワークにおいて幅広い実践レベルと多様な特徴をもつレパトリーの一つに位置づけ

ることができるだろう。それは、ソーシャルワーク・レパトリーとしてのケアマネジメントが、ミクロからマクロの実践的な特徴から政策的な特徴までをあわせもつ新たな方法として考えられるからである。このことは、ミクロからマクロの包括・統合的な展開が求められる今日のソーシャルワークにおけるケアマネジメントの重要性を強調するだろう。その一方で、これらの多様な特徴を利用者の支援過程に具体化するケアマネジメントの展開モデルはまだ明らかになっていない。また、その展開モデルを実践検証する研究方法についても、これから検討していく段階である。そのため、これまで述べてきた幅広い特徴を網羅した包括・統合的なケアマネジメントの展開モデルを提示することと、それを実践検証して精緻化し、一般への普及をめざした研究方法を検討することが今後の研究課題となるだろう。

《参考・引用文献》

- 太田義弘 (1992) 『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』 誠信書房
- 太田義弘・秋山薊二 (2002) 『ジェネラル・ソーシャルワーク』 訂正第4刷 光生館
- 太田義弘・小榮住まゆ子 (2005) 「高齢者に対する生活支援過程考察の意義 ―ケアマネジメントの実態調査を通じて―」 『関西福祉科学大学紀要』 第9号 関西福祉科学大学
- 大塚達雄・井垣章二・沢田健次郎・山辺朗子 (1994) 『ソーシャル・ケースワーク論 社会福祉実践の基礎』 ミネルヴァ書房
- 大塚達雄・硯川眞旬・黒木保博 (1986) 『グループワーク論 ―ソーシャルワーク実践のために―』 ミネルヴァ書房
- 久保紘章・副田あけみ編 (2005) 『ソーシャルワークの実践モデル 心理社会的アプローチからナラティブまで』 川島書店
- 国際ソーシャルワーク学校連盟・国際ソーシャルワーカー連盟 (2009) 『ソーシャルワークの定義 ソーシャルワークの倫理：原理についての表明 ソーシャルワークの教育・養成に関する世界基準』 相川書房
- 白澤政和 (1992) 『ケースマネジメントの理論と実際 - 生活を支える援助システム - 』 中央法規
- 副田あけみ (1999) 「ケアマネジメントが社会福祉実践に与える意味」 『社会福祉研究』 第75号 財団法人鉄道弘済会
- 高森敬久・高田真治・加納恵子・定藤丈弘 (1989) 『コミュニティ・ワーク 地域福祉の理論と方法』 海声社
- 武田丈 (2002) 「ソーシャルワーク・リサーチ」 黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編 『福祉キーワードシリーズ ソーシャルワーク』 中央法規
- 中村佐織 (2002) 『ソーシャルワーク・アセスメント コンピュータ教育支援ツールの研究』 相川書房
- 橋本泰子・竹内孝仁・白澤政和 (2000) 『海外と日本のケアマネジメント』 中央法規
- Bartlett, H. M. (1970) The Common Base of Social Work Practice, NASW (= 2009, 小松源助訳『社会福祉実践の共通基盤』 ミネルヴァ書房)
- Konopka, G. (1983) Social Group Work: A Helping Process 3rd ed., Prentice-Hall
- Moore, S. T. (1990) "A Social Work Practice Model of Case Management: The Case Management Grid", Social Work, Vol.35 No.5, NASW
- Moxley, D. P. (1989) The Practice of Case Management, Sage
- Philip, A. E., McCulloch, J. W. and Smith, N. J. (1975) Social Work Research and the Analysis of Social Data, Pergamon
- Raiff, N. R. and Shore, B. K. (1993) Advanced Case Management: New Strategies for the Nineties, SAGE

- Richmond, M. E. (1922) What is Social Case Work?: An Introductory Description, Russell Sage Foundation (= 1991, 小松源助訳『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』中央法規)
- Richmond, M. E. (1930) The Long View: Papers and Addresses, Russell Sage Foundation
- Rose, S. M. (1992) "Case Management: An Advocacy/Empowerment Design", Rose, S. M. ed., Case Management and Social Work Practice, Longman Publishing Group (= 1997, 「第20章 ケースマネジメント - アドボカシー/エンパワーメント・デザイン」, 白澤政和・渡部律子・岡田進一監訳, 『ケースマネジメントと社会福祉』ミネルヴァ書房)
- Skidmore, R. A. (1995) Social Work Administration: Dynamic Management and Human Relationship 3rd ed., Allyn and Bacon
- Skidmore, R. A., Thackeray, M. G. and Fraley, O. W. (1994) Introduction to Social Work 6th ed., Prentice Hall
- Toseland, R. W. and Rivas, R. F. (1998) An Introduction to Group Work Practice, Allyn and Bacon (= 2003, 野村豊子監訳, 福島喜代子・岩崎浩三・田中尚・鈴木孝子・福田俊子訳『グループワーク入門 あらゆる場で役に立つアイデアと活用法』中央法規)
- Zastrow, C. (2007) The Practice of Social Work: A Comprehensive Worktext, THOMSON

(2012年8月1日受理)

(この たかし 京都府立大学公共政策学部非常勤講師)